

不破まで来れば岩手はもうすぐそこである。乾いた街道の両側に数軒の人家が散らばって、煙が昇っている家もある。左手、人家が途切れる先の山裾は、篠と茅の原が続いて、所々その原を切り裂いたように細い道が山に向かって伸びていた。

十一年前、北陸、東北から江戸に向かう旅の一步を踏み出したのが美濃岩手だった。

傘狂の門下に加えてもらえたことで、八か月に及ぶ江戸までの旅を成就させることが出来た。

傘狂の添書きは、次に頼れる人を確かなものにしてくれた。そればかりか、関所を通る手助けにもなった。

傘狂の紹介で会った人は更に次に頼る人を紹介してくれた。その連鎖が江戸まで続いたのである。

竹中半兵衛の堅牢な屋敷の前を通り過ぎると右手に畑の広がりが見えて来た。年月は過ぎたが、記憶の中に確かな風景として刻まれている。

木立に沿って左に曲がれば、五町ほど先に傘狂の屋敷が見えて来るはずである。

昂ぶる気持ちに急かされて歩幅を早めたミチの後ろを、小走りに近づくと人の気配がした。

数間の距離に近づいた人影がにわか大きな声をあげた。

「やっぱり菊舎さんですね。辻を曲がったところで先を行く人影が菊舎さんではなかるうかと思つて必死で追いかけてきました。また会えてこんなに嬉しいことはありません」
そう言つてミチに追いつくと、両手でミチの腕をからめ取るように抱え込んだのはおとよだった。

「ずっと会いたいと思ひ続けていれば、きつといつかはまた会えると信じていました。よかつた、本当に……」

泣き虫のおとよは、そう言いながらも目には一杯の涙を浮かべている。涙の目がきらきらと輝いて、頬は上気して真っ赤だった。

その真っ赤な頬を、溢れた出た涙が糸を引いてすべり落ちた。

「竹蔵ですか？お蔭でもう十八になりました。近頃では亭主よりうんと仕事がさばけるようになって、朝から田の畔づくりに出ています」

顔は笑っているのに、おとよの臉には次々と涙が溢れて止まらない。

「傘狂先生は去年隠居をされて、今朝、野菜を届けた時に釣りの仕度をされていましたから、恐らくまだ堤にいらつしやるはずですよ。ほら、竹蔵が溺れたあの大池ですよ。行つてみましょう」

言い終らない内におとよは、ミチの背中の荷物をはぎ取る

と、もう片方の手でミチの手を引き猛然と歩き始めた。ミチは引きずられて思わず転びそうになった。

道の両側の田はどれも畔塗りが終わって、いつでも水を入れることが出来そうだ。

所々で鍬を振るう人影が見えるのは、鋤いたあとの土くれをほぐす田打ちの最中だろう。

すると、おとよがいきなりすつとんきような声をあげた。

「ありや、あそこを歩いているのは傘狂先生だわ。せんせい！」

見れば釣竿を担いだ人影が、一、二町先の田の畔をゆつくりと歩いている。

昔見慣れた袴姿ではない。かるさん袴に陣笠を被りたすき掛けという物々しいいでたちである。

「まるで戦にでも行くようですよ。恰好は一級、腕前は三級なのですよ。今日もきつと坊主ですよ」そういつておとよはコロコロと笑い転げた。

その声が聞こえたのか、それともはミチの姿に気付いたのか、傘狂は身振りですちらへ行くと伝えて体の向きを変えた。

二人が並んで立っている道まで畔を伝って来た傘狂は、ミチの顔を見るなり

「この親不孝者！」と一喝した。だけど顔は崩れるほど笑っている。

「美濃では私が菊舎殿の親。女一人で江戸に送り出したあ

と、私は間違っていたのではないかと随分悩みました。超石さんもしつこいくらい貴女の一人旅を止めてくれと言っていた。しかし長門のお父上は貴女の一人旅をお許しになっている。これでいいのだ、間違いではなかったのだ、と思っていたのに中々割り切ることが出来ませんでした、こうして顔を見ることが出来て、いやいやもう何もいう事はありません。よく来てくれました」

日頃余分なことは余り喋らない傘狂が、妙にはしゃいでいるようだった。

ミチは、超石の名前を聞いて

「長門なる菊舎が顔は鬼瓦」といじめにかかった顔と、立ちの日、明けきらぬ街道に立ち尽くしてミチを見送った姿を同時に思い出した。

「超石さんは相変わらず毒舌ですか？」と問うミチを見た傘狂の顔が一瞬曇った。

「その超石さんですがこの春先に亡くなりましたね。私が見舞った時に菊舎さんのことばかり尋ねるので、二度目の見舞いに去年もらった貴女の手紙を持って行ったのですが、何度も何度も読み返しては一人で頷いていましたよ」

「あの人は、十歳だった一人娘を亡くしているので、余計貴女のことを気になったのでしょう。帰ろうとするのに手紙を離そうとしないので、次に来た時に返して貰いましょう、と言つていとまをしたのですが、返してもらったのは葬儀の

日でした」

明けの明星を背にして道の真ん中に仁王立ちでミチを見送った超石は、あの日ミチの姿が街道の薄明りに溶けて見えなくなっても動くことが出来なかった。

すっかり明けてしまった街道に人の姿がちらほら見える頃になって、ようやく楠の老木の陰に隠れるようにして、肩を震わせて泣いた。

僅か五日寝込んだだけで逝ってしまった娘の告別の日、超石は刀を握ると屋敷の裏山に入った。永い間子宝に恵まれずやっとな授かった一粒種が、たった十年の生涯を終えた。余りに酷い天の仕打ちを超石は我慢ができなかった。

娘の誕生の日に植えた時は一尺足らずだった苗木が、三間余りに成長した檜を一刀のもとに切り倒した。超石はこれを娘との別れの儀式にした。

以来、娘と同世代の女子とのかかわりを避けるように暮らして来たが、その片意地はミチと出会って呆気なく崩れてしまった。

超石の仕掛けを見事にかわしたミチが、利発だった娘の姿に重なった。

二十年、無理矢理娘の記憶を封印して生きて来たのに、菊舎の聡明が娘に似ている、ふとそう思った途端、頑迷だった記憶の覆いは完全に溶解してしまっていた。

そうなるミチの事が気にかかってしようがない。傘狂にしつこくミチの旅立ちを止めるよう頼んだ。

旅立ってしまった後は、傘狂に会うたびにミチの消息を尋ねた。そうやってミチのことを気遣い、もう一度会いたいと何度も呟いていた超石は亡くなったのだ。

傘狂から話を聞いたミチは、息を切らして街道までミチを追って来た超石の顔が、初めて会った時の、あの意地悪な顔とはまるで違っていたことを思い出した。

本当は優しい人だったのだ。もう少し早く此処へ来ることを思い立てばよかった。

傘狂先生が居て超石が居た。その上泣き虫のおとよがいる美濃は、私のもう一つのふるさとなのかもしれない、とミチは思うのだった。